

である。このことから、本地域の弥生時代前期の墓制は小児用は壺を用いたものであった可能性があり、成人用は土壙墓ないしは木棺墓であった可能性がある。今後の調査の進展に期待したい。

## 参考・引用文献

- 橋口達也 1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI 中巻 福岡県教育委員会  
橋口達也 1985「V南筑後における甕棺の編年」『権現塚北遺跡』瀬高町文化財調査報告書第3集 瀬高町教育委員会  
田中康信編 1988『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書第4集 瀬高町教育委員会  
橋口達也 1993「甕棺—製作技術を中心としてみた諸問題—」『考古学研究』40巻3号 考古学研究会  
中園聰 2004『九州弥生文化の特質』 九州大学出版会  
進村真之 2007『小川柳ノ内遺跡Ⅰ』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集 福岡県教育委員会  
猿渡真弓 2007『竹飯地区遺跡 竹飯堺遺跡 竹飯犬ノ馬場遺跡』高田町文化財調査報告書第10集 高田町教育委員会

## 3 藤の尾垣添遺跡周辺の竪穴住居の構造

－弥生時代後期～古墳時代中期前半事例の検討－

### a. はじめに

1の本遺跡集落の変遷で検討したように、本遺跡では弥生時代後期～古墳時代中期前半に属する竪穴住居跡が約90棟検出されている。本遺跡の発掘調査範囲は、1次調査は排水路部分、2次調査は新幹線路線という非常に狭長な調査区であったため、竪穴住居の全形を知りえたものは少ない。しかし、『藤の尾垣添遺跡Ⅰ・Ⅱ』の中で、本遺跡内において竪穴住居跡の平面形が長方形から方形に変化する過程を読み取れることを指摘した。そこで、ここでは本遺跡を含むみやま市内で検出された弥生時代後期～古墳時代中期前半の竪穴住居の変遷を検討してみたい。

### b. 竪穴住居の分析方法

本稿対象時期における北部九州の竪穴住居については、寺井誠氏による優れた先行研究があり（寺井 1995）、本稿でも他地域の事例と比較することで、本地域の位置づけを明らかにするために、寺井氏の分析手法に則って行うこととした。

寺井氏は分析対象とする竪穴住居の条件として、「全掘もしくはそれに準ずる程度に調査され、全貌を知ることができるもの」とするが、本稿では時期や主柱穴が明確でない竪穴住居跡も参考資料として第160図の一覧表に掲載した。この第160図では寺井氏による集成に倣い、平面形・主柱穴数・法量（長軸・短軸）・面積・長短比・ベッド状遺構型式の順に表を作成した。このうち、ベッド状遺構の型式については、第161図左下の寺井氏の分類によるが、図だけでは少し分かりにくいので簡単に説明すると、A類は壁隅、B類は短辺の1辺、C類は短辺の一辺と壁隅、D類は両短辺、E類は3方、F類は4方に付設するもので、N類はベッド状遺構のないものとしている。なお、本地域対象遺跡は沖積地や微高地上に立地するが多く、本遺跡でも竪穴住居跡下層に弥生時代中期の甕棺墓や弥生時代前期の土坑などがあることが多く、ベッド状遺構を誤って掘り失ったものもある。このような遺跡条件により、ベッド状遺構に気づかず、住居竪穴部だけを1棟の住居とした事例も存在する可能性が高く、本地域ではN類が

番号	遺跡名	住居番号	住居時期	平面	PL	長軸	短軸	面積	長短比	BN	備考	文献
1	三船山遺跡	住1	後期初頭	方形	2	5.15	4.5	23.2	87%	N	黒髪式系台付窓あり	川述ほか1985
2		住2	後期前半	方形	2	4.15	3.83	15.9	92%	N	張り出し部あり	
3		住3	後期前半	方形	2	4.95	3.9	19.3	79%	N	黒髪式系台付窓あり	
4		住5	後期初頭	方形	2	4	3.7	14.8	93%	N	主柱穴短軸上、黒髪式系台付窓あり	
5		住8	古墳前期前半	方形	2	5.1	4.2	21.4	82%	N		
6		住9	後期終末	方形	2	7.28	5.45	39.7	75%	E	4本柱の補助柱ありか	
7		住10		方形		4.35	3.88	16.9	89%	N		
8		住11	後期初頭	方形		4.6	4.4	20.2	96%	N	黒髪式系台付窓あり	
9		住12	後期終末	方形	2	5.6	4.9	27.4	88%	N		
10		住14		方形	2	5.05	3.7	18.7	73%	N		
11		住16		方形	2	6.8	5.88	40.0	86%	B		
12		B-住3	後期初頭	方形		5.05	3.85	19.4	76%	N		
13		B-住16	後期後半	方形	2	4	3.26	13.0	82%	A		
14		B-住27	後期終末か	方形	2	4.3	3.4	14.6	79%	N		
15		B-住30	古墳前期前半	方形	2	6.15	3.35	20.6	54%	N		
16		C-住1	古墳前期前半	方形	2	3.7	3.5	13.0	95%	A		
17	大道端遺跡1次	F-住7	古墳前期前半	方形	2	7.9	6	47.4	76%	F		閑編1977
18		F-住12	古墳前期前半	方形	2	5.46	2.8	15.3	51%	N		
19		H-住3	古墳前期前半か	方形	2	6.04	4.04	24.4	67%	N		
20		H-住10	古墳前期	方形	2	3.4	2.6	8.8	76%	N		
21		住3	古墳前期前半	方形		5.1	5.1	26.0	100%	N		
22		住11	古墳前期中葉	方形		3.6	3.5	12.6	97%	N		
23		住24	古墳前期前半	方形		5.04	3.82	19.3	76%	N		
24		住2	古墳前期中葉	方形		4.2	3.3	13.9	79%	N		
25	海津横馬場遺跡	住3	後期終末	方形	2	6.06	4.84	29.3	80%	N		進村・宮地2005
26		住4	後期後半～終末	方形	2	5.4	4.5	24.3	83%	N	主柱穴短軸上	
27		住7	古墳前期中葉	方形		4.6	3.45	15.9	75%	N		
28		住35	古墳前期前半	方形	2か	5.2	4.9	25.5	94%	B		
29		住37	後期終末	方形	2	5.9	4.5	26.5	76%	N		
30		4区住15	古墳前期前半	方形	2	6.1	4.4	26.8	72%	D		
31		4区住17	古墳前期前半	方形	2	4	3.95	15.8	99%	N		
32		4区住18	古墳前期中葉	方形		3.1	2.9	9.0	94%	N		
33		4区住19	古墳前期前半	方形		3.1	3	9.3	97%	N		
34		6区住3	古墳前期前半	方形		3.8	2.9	11.0	76%	N		
35	小川柳ノ内遺跡	7区住1	後期後半	方形		5	4.6	23.0	92%	N		進村2008
36		7区住14	後期終末～古墳時代前期	方形		4.6	4.6	21.2	100%	N		
37		住4	古墳前期後半	方形		4.88	2.8	13.7	57%	N		
38		住5	古墳前期中葉	方形		4.8	3	14.4	63%	N		
39		住6	古墳前期後半	方形		4.72	3.7	17.5	78%	N		
40	御仁田遺跡	住8	古墳前期後半	方形		6.1	5.2	31.7	85%	E		田中1995
41		住9	古墳前期後半	方形		5.7	5.4	30.8	95%	N		
42		住10	古墳前期	方形		4.24	3.8	16.1	90%	N		
43		3区住2	古墳前期前半	方形	2	5.1	3.7	18.9	73%	D	主柱穴短軸上	大庭編2007
44		4区住41	後期終末か	方形		4.4	4.1	18.0	93%	N		
45	山門片垂遺跡	住8	後期終末	方形	4	3.9	3.4	13.3	87%	N		田中編1998
46		山門牛島遺跡	A1区住3	後期終末か	方形		3.3	2.6	8.6	79%	N	
47		住1	古墳前期中葉	方形	2	2.7	2.7	7.3	100%	N		
48		住2	古墳中期前半か	方形		2.6	2.4	6.2	92%	N	出土土器図示なく、時期は記述による	
49		住6	古墳前期中葉	方形		3.15	2.85	9.0	90%	B		
50	藤ノ尾車塚遺跡	住1	古墳前期前半	方形		6.52	4.34	28.3	67%	D		田中1994
51		住4	古墳前期前半	方形	2	4.86	3.54	17.2	73%	N		
52		住6	古墳前期前半	方形		3.8	3.1	11.8	82%	N		
53		住10	古墳前期中葉	方形		3.9	2.8	10.9	72%	N		
54		住11	後期前半	方形		3.56	3.24	11.5	91%	N		
55		住12	古墳前期中葉	方形		4.26	3.72	15.8	87%	F		
56		住15	後期終末	方形		3.92	3.12	12.2	80%	N		
57		住16	後期後半	方形		3.36	2.92	9.8	87%	A		
58		住17	後期終末	方形	2	4.38	3.16	13.8	72%	N		
59		住2	古墳中期前半	方形		6.58	6.34	41.7	96%	N	張り出し部あり	田中編1989
60	藤の尾垣添遺跡1次	住4	古墳前期後半	方形		7.6	6	45.6	79%	N		
61		住12	古墳前期後半	方形	4	6	5	30.0	83%	N		
62		住12	古墳中期前半か	方形	4	4.08	4	16.3	98%	N		
63	藤の尾垣添遺跡2次	住15	古墳前期後半	方形	2	6.8	5.05	34.3	74%	E	3本柱の補助柱ありか	大庭編2008
64		住16	古墳前期前半	方形	2	4.4	2.7	11.9	61%	D		
65		住17	古墳前期前半	方形		4.9	3.65	17.9	74%	C		
66		住21	古墳前期前半	方形	2	6.95	3.8	26.4	55%	C	主柱穴短軸上、5本柱の補助柱ありか	
67		住32	後期終末	方形		4.37	4.35	19.0	100%	N		
68		住33	後期後半	方形		5.32	4.75	25.3	89%	N		
69		住37	後期後半	方形		3.33	2.55	8.5	77%	B		
70		住38	後期終末	方形	2	4.94	4.23	20.9	86%	N		
71		住40	古墳前期前半	方形		4.43	3.55	15.7	80%	E		
72		住41	後期後半	方形	2	6.1	4.35	26.5	71%	D		
73	藤の尾垣添遺跡2次	住52	後期終末	方形	2	4.34	3.8	16.5	88%	B		大庭編2009
74		住54	古墳前期か	方形	2	4.23	3.72	15.7	88%	N		
75		住67	古墳前期前半	方形	2	3.85	3.8	14.6	99%	D		
76		住68	古墳中期か	方形	4	4.15	3.72	15.4	90%	N		
77		住69	後期終末	方形		5	2.85	14.3	57%	D		
78		住72	後期終末	方形		4.35	4.1	17.8	94%	N		
79		住75	後期前半	方形	4	4.96	4.9	24.3	99%	N		
80		住76	古墳前期中葉	方形	2	6.5	3.2	20.8	49%	D		

#### 文献

川述昭人・池辺光明・木下修1985「三船山遺跡」『観音丸遺跡・向野古墳群・三船山遺跡』福岡県文化財調査報告書第71集 福岡県教育委員会

閑晴彦編1977「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XIV」福岡県教育委員会

田中康信1993「大道端・北古賀遺跡」『瀬高町文化財調査報告書第10集』瀬高町教育委員会

進村真之・宮地聰一郎2005『海津横馬場遺跡』『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第1集』福岡県教育委員会

宮地聰一郎編2006『海津横馬場遺跡II』『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第2集』福岡県教育委員会

進村真之2007『小川柳ノ内遺跡II』『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第7集』福岡県教育委員会

進村真之2008『小川柳ノ内遺跡III』『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第8集』福岡県教育委員会

田中康信1995「御仁田遺跡」『瀬高町文化財調査報告書第12集』瀬高町教育委員会

大庭孝夫編2007『山門北池遺跡』『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第6集』福岡県教育委員会

田中康信1998『瀬高地区遺跡群II』『瀬高町文化財調査報告書第15集』瀬高町教育委員会

田中康信1991『山門遺跡群II』『瀬高町文化財調査報告書第7集』瀬高町教育委員会

田中康信1992『山門遺跡群II』『瀬高町文化財調査報告書第8集』瀬高町教育委員会

田中康信1994『藤ノ尾車塚遺跡II』『瀬高町文化財調査報告書第11集』瀬高町教育委員会

田中康信1996『藤ノ尾車塚遺跡II』『瀬高町文化財調査報告書第13集』瀬高町教育委員会

田中康信編1989『藤の尾垣添遺跡II』『瀬高町文化財調査報告書第5集』瀬高町教育委員会

大庭孝夫編2008『藤の尾垣添遺跡II』『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集』福岡県教育委員会

大庭孝夫編2009『藤の尾垣添遺跡II』『九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第14集』福岡県教育委員会

第160図 分析対象堅穴住居跡一覧

全体でも 75% と、寺井氏が分析した割合に比べ高い要因になっていると考えられる。

#### c. 本地域における竪穴住居の分析

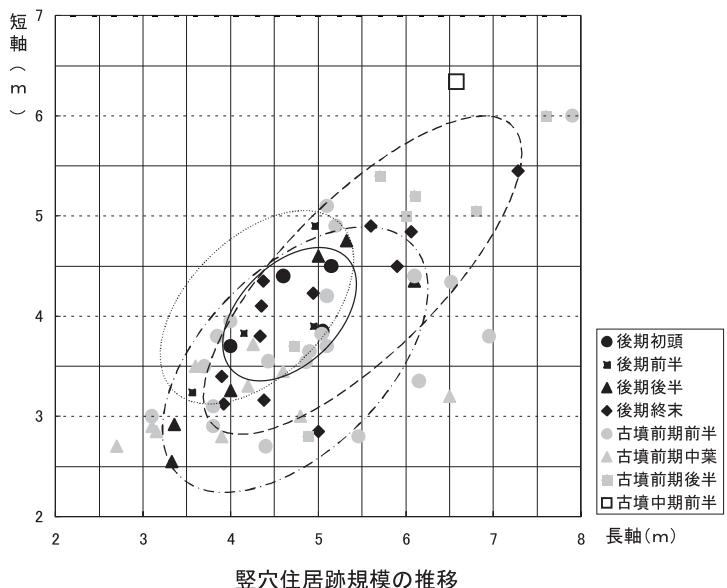
第 160 図の一覧表から、第 161 図にある竪穴住居跡規模の推移・面積推移・長短比、ベッド状遺構の形態推移図を作成した。これらを基に本地域の竪穴住居の分析を行いたい。

まず、竪穴住居の平面形態と面積を見てみると、弥生時代後期初頭及び後期前半のものは規模推移図、長短比、面積もほぼ一致し、平面形はやや長方形に近く、面積は  $11 \sim 24 \text{ m}^2$  程とやや小形である。後期後半になると、規模推移図の囲み線が下がり、面積も若干大きくかつ長短比が低くなり、その後顕在化する偏長化傾向が現れ始める。後期終末になると、対象竪穴住居数が急激に増加する。平面形では、本遺跡 2 次 69 号住居跡例が長短比 57% と偏長化が進む竪穴住居が存在する一方、長短比 80% 前後の長方形を呈するものが主体である。面積は増加傾向にあり、三船山遺跡 9 号住居跡のような  $39.7 \text{ m}^2$  を測る大形住居も認められる。古墳時代前期前半には最も多くの竪穴住居が属し、前期前半・中葉では一部の竪穴住居で偏長化が顕著となる。面積では、 $47.4 \text{ m}^2$  を測る大道端遺跡 F 区 7 号住居跡のような大形住居も認められるが、主体は後期終末とほとんど同じ規模である。前期後半になると、平均面積が  $29 \text{ m}^2$  と面積が急激に増加し、長短比の平均も 78% と徐々に方形化の傾向が伺える。古墳時代中期前半の事例は本遺跡 1 次調査 2 号住居跡（第 161 図右下）のみであるが、長短比が 96% とほぼ方形化を達成している。

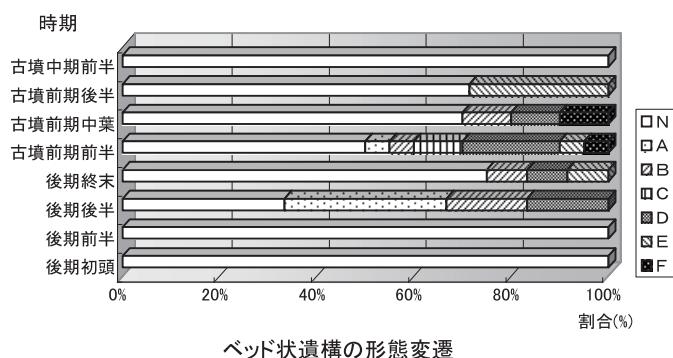
次にベッド状遺構の型式変遷を見てみると（第 161 中左）、対象とした竪穴住居では弥生時代後期初頭及び後期前半はベッド状遺構はないものの、三船山遺跡では後期前半の 3 号住居跡がベッド状遺構を付設した 19 号住居跡（B 類）を切ることから、後期前半にはベッド状遺構は確実に存在している。後期後半は A 類 33%、B・D 類 16%、後期終末は B・D・E 類が各 8% と 3 方に付設する E 類が寺井氏の指摘どおり本地域にも導入され、ベッド状遺構の住居内占有率が低→高になる傾向も一致する。古墳時代前期前半は全型式が認められ、中でも D 類が優位となり、かつ F 類も存在する。前期中葉には B・D・F 類のみと A・C 類がなくなり、前期後半は E 類のみとなる。寺井氏が西部地域では 4 本柱が普及する前段階にベッド状遺構が減少すると指摘したように、本地域においても古墳時代前期中葉・後半にはベッド状遺構の割合が 25% と前段階に比べ減少し、中期前半は N 類のみとなる。なお、4 本柱が主柱穴の竪穴住居は、対象とした遺構では弥生時代後期前半の本遺跡 2 次 75 号住居跡、後期終末の山門北池（松延）遺跡 8 号住居跡、前期後半の本遺跡 1 次調査 12 号住居跡の 3 棟のみに認められる。

#### d. 本地域の竪穴住居の位置づけ – 寺井氏の検討結果との比較から –

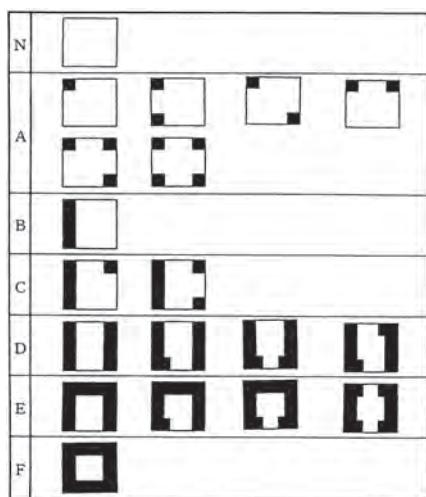
本地域では、弥生時代中期前半までは小川柳ノ内遺跡や海津横馬場遺跡で確認されたような円形住居となるが、中期後半の竪穴住居跡は確認されておらず、平面形を含めた構造は不明である。弥生時代後期になると、後期初頭には平面は方形に変化しており、主柱穴も 2 本柱が基調となる。本遺跡 2 次調査 75 号住居跡のような 4 本柱のものは、豊前・筑豊地域など東方からの影響を受け成立したものであるかは、同じく 4 本柱の後期終末の山門北池（松延）遺跡 8 号住居跡例も含めて事例が少ないともあり、注意を要する。なぜなら、肥前地域では庄内式並行期には 4 本柱はないが、布留式古・中段階並行期には竪穴住居跡全体の 6 割強が 4 本柱とな



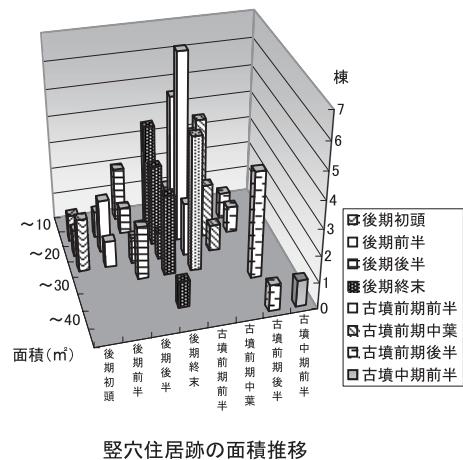
豊穴住居跡規模の推移



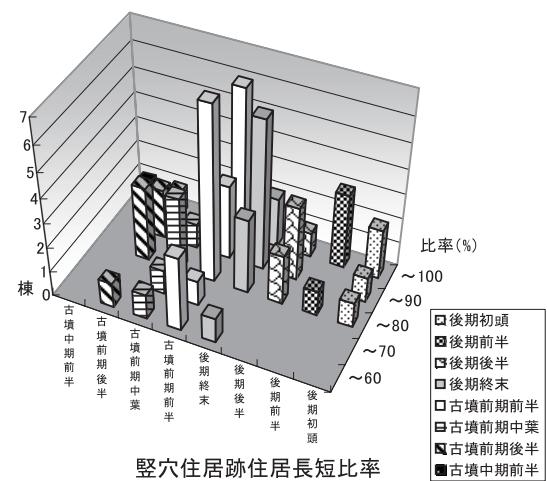
ベッド状遺構の形態変遷



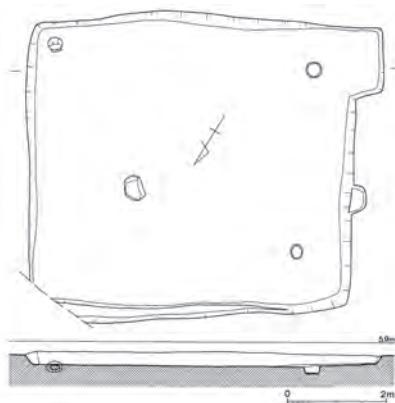
ベッド状遺構の分類(寺井1995より引用)



豊穴住居跡の面積推移



豊穴住居跡住居長短比率



方形4本主柱穴例(藤の尾垣添遺跡1  
次住2:1/100)

第161図 藤の尾垣添遺跡周辺における豊穴住居跡の変遷

とした蒲原宏行氏の考察（蒲原 1994）や、寺井氏の検討でも4本柱が筑前・筑後地域に定着するのは布留式新段階であることがある。また寺井氏によると、布留式新段階以前の筑前・筑後地域では長短比が80%を上回ることはほとんどなく、ベッド状遺構は布留式新段階ではほぼN類が占めることから、豊前・筑豊地域の影響を受けた4本柱住居の本地域への導入は、古墳時代前期後半の本遺跡1次調査12号住居跡が初現期のものとなる可能性が高い。

本地域の堅穴住居の特徴としては、弥生時代後期終末～古墳時代前期後半の一部の堅穴住居では長短比が50%前後と極めて低いものが存在するとともに、古墳時代前期後半でも長短比の平均が79%と低いことがある。加えて、ベッド状遺構の付設割合は、弥生時代後期後半では7割、古墳時代前期前半では5割、前期中葉・後半では25%、中期前半は0%と、寺井氏の検討結果とは、本地域ではN類が多い影響はあるものの、およそ傾向は一致するが、古墳時代前期後半では北部九州全体ではベッド状遺構が1割以下しかないのでに対し、本地域では25%と割合が高い。寺井氏は筑前・筑後地域の布留式新段階では、豊前・筑豊地域と同じく、大形住居が4本柱、小形住居が2本柱という住居構成に変化するとするが、本地域では主柱穴は確認できていないものが多いが、長短比からそのような構成区分になっていない可能性が高い。

#### e. おわりに

以上の比較検討結果から、本地域では古墳時代中期にならないと、寺井氏が指摘した方形4本主柱という新たな堅穴住居要素を本格的に受容しておらず、古墳時代前期でも大形住居－4本柱、小形住居－2本柱という構成区分を採用していない可能性が高い。このことは、本遺跡2次調査76号住居跡出土甕のような、外来系甕（主に庄内系甕）と在地系甕が折衷したものを作り出していることに象徴されるように、本地域の在来集団が布留系土器製作技術や他の外来系文化要素の受容に慎重であったことを示していると考えられる。

今回の検討結果はあくまでも現時点での評価である。瀬高インター建設に伴う山門牛島遺跡の調査では当該期の堅穴住居が多く発見されていることや今後の調査の進展などで、この評価が変わる可能性も大いにありうる。また今回は検討できなかったが、柳川市蒲船津江頭遺跡で確認された弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物群との比較なども、本地域の堅穴住居を分析する上では必要であろう。今後の調査・研究の進展に期待したい。

### 引用文献

蒲原宏行 1994「古墳時代初頭前後の佐賀平野」『日本と世界の考古学－現代考古学の展開－』岩崎卓也先生退官記念論文集 雄山閣  
寺井誠 1995「古墳出現前後の堅穴住居の変遷過程－北部九州の事例を基に－」『古文化談叢』第34集 九州古文化研究会

## 4 藤の尾垣添遺跡出土赤色顔料関連資料について

#### a. はじめに

本遺跡を最も特徴づける資料を出土資料の中から選ぶとすれば、私は迷わず、赤色顔料が付着した土器・石器の存在を第一に挙げたい。この赤色顔料が付着した本遺跡出土土器・石器の内容を見てみると、本田光子氏により内面朱付着土器と命名された（本田 1994）、土器の主に